

# 藻場の人為的かく乱に「待った」

志津川湾の藻場の津波被害マップを手掛かりとした、藻場の復元・再生をどのように進めていくかを住民と共に考えるためのワークショップが14日、志津川地区のホテル調洋で開かれ南三陸町内の漁業関係者やNPO、大学の研究職員、行政などから約100人が参加した。

第一部では、町や大学の研究所など4団体が志津川湾の藻場の現状を報告。海の環境保全調査などを行なう環日本海環境協力センター(NPCC)は、人工衛星などを利用

して対象を観測するリモートセンシング技術を活用して、東日本大震災における藻場の被害状況を3年計画で調査していく、その中間成果の紹介を行なった。

第一部では、町や大学の研究所など4団体が志津川湾の藻場の現状を報告。海の環境保全調査などを行なう環日本海環境協力センター(NPCC)は、人工衛星などを利用

な意見が飛んだ。歌津地区寄木の男性から「寄木は川もあり海産物が獲れる所だが、防波堤の建設により生態系が変わり、アマモが付かなくなるのが心配」と疑問があり、これに対してNPPO法人

環境生態工学研究所の佐々木久雄理事は、気仙沼や釜石などの事例をあげながら、「志津川には立派な藻場があり、それを壊してまで造るのか、こういうった場をきっかけに」と話し合い、まじょう」と議論の重要性を訴えた。

があった場所には作らないでほしい」と行政に訴える上で役立つはず」と提案。それに対し、町産業振興課の太齋彰浩水産業振興係長は「支援マップは根拠として出せると思う。防波堤に対する見解は「行政」と言っても町、県、国でそれぞれ違う。住民と研究者がタッグを組んでほしい」と回答した。



報告するNPCC職員